

昭和三年二月十六日第三種郵便物認可(毎月一日一回發行)

主筆 江原萬里

聖書の眞理

第五十六號

六月號

文明の反逆者

主筆

祈つて其の效驗ありや

主筆

神を求むる心(中)

江原萬里

エレミヤ記の研究

江原萬里

陶工と陶土(上)

洗者ヨハネの疑問

森本慶三

受難週間の研究

小栗襄三

柏木通信

齋藤宗次郎

祖父の書翰

江原萬里

クロムウエルと獨裁政治

身邊漫筆

昭和七年六月一日發行

クロムウエルと獨裁政治

フハシズムの壇頭せる現時、日本の政治家軍人はオリバー・クロムウエルに學ぶべき多くのものがある。

英國王チャールズ一世は帝王神權説を固持した。王は神を代表して國に君臨し、民を赤子として愛撫するも、其の權力は絶對であつて、人民は只之に服従あるのみと考へた。此の主義を以て英國に理想の政治を行はうとし、現實に即せず、只管空理想を追うた。

之がため王と議會とは戦端を開くに至つた。議員であつたクロムウエルは戦始まるや史上有名な鐵衛隊を組織し、他の議會軍が王軍のため破られたに拘はらず、獨り連戦連勝、遂に王軍を屏息せしめた。彼が王軍を破つた目的は、王をして現實を正視せしめる事であつて、最初から王政を廢する意志は毛頭もなかつた。それ故彼の軍隊中に發生した革命思想家は、彼が王と度々會合するのを見て、自分は近衛の大將となり、其の婿アイアトンを愛蘭總督にするための交渉とし、野心家、策士、偽善者と云ひて甚しく誤解した。

然るに他方、王はクロムウエルが自ら榮爵を望まないのを見て、最も王のため計るに忠實であつた彼を忌み嫌ひ、彼の軍隊と議會とを對立抗争せしめ、漁夫の利を占めんとした。英國は四分五裂に瀕した。王は此の機に乗じて再び内亂を起した。王の處刑は最早避けることを得ない。爰に於てクロムウエルは斷然王政を廢する事に同意し、王の處刑狀に署名した。一旦決意したら最早棒でも棒でも動かない。彼は其の場に臨んで署名に後込みした同僚の手を把つて早く早く急いだとさへ傳へられて居る。

王の處刑の夜、遺骸が王宮の一室に安置され、二三の廷臣通夜を

した。其の夜遅く、何者か黒衣を頭から引被つた壯漢が入り來り、棺前に黙禱を獻げ、*Cruel necessity* と呟いて去つたものがあつた。彼だと云はれて居る、

王の處刑は愛蘭及びスコットランド人を怒らしめ、兩者と戦端が開かれた。クロムウエルは先づ愛蘭を伐ち、次でダンバーにウィスターに蘇軍を粉砕した。此の頃も議會と軍隊とは融和しなかつたが、赫々たる武勳を立てた軍隊の不平等を抑制し、克く之を議會に忠誠ならしめた者は彼であつた。クロムウエルは出来る限りの力を盡くし、自己を抑えて、議會を權威あらしめ、共和制を完くせんとした。

之がため彼は度々、既に十三年間一度も解散を行はないうで繼續して居る所謂長期議會に一日も早く解散し、民意に副ふやう新に選舉を行へと勸告した。議會は之を聞かず、無期に繼續を決議しやうとした。之を聞くや彼は急遽議席についた。そして烈火の如く怒號し議員の名は云はなかつたが一一其の非を難詰し、之の不正を罵り、護衛兵をさし招いて遂に議會を解散して仕舞つた。

彼以外に何人も責任を荷ふ者はない。已を得ず彼は獨裁政治を創めた。速に議會に政權を譲らうとしたが、議會は彼に王位に即くことを勧めた。彼は拒んだが事實上無冠の王となつた。彼の爲した事は悉く彼の最初の意志と反した。始め王政を維持しやうとして、王を處刑し、次で共和政を維持しやうとして、クーデターを行ひ、遂に彼が最も嫌惡した獨裁者となつた。一生は悲劇であつた。

然かも彼があつて英國の議會制度は世界の模範となつたのである。彼以來不法なるチャールズ王は出でず、又長期議會はなくなつた。軍人、政治家以上に彼は清教徒の信仰に生きたから之が出来たのである。

聖書之眞理

第五十六號

昭和七年六月一日發行

文明の反逆者

主 筆

ノアの大洪水があつた前、「人々飲み食ひ、娶り嫁がせなごし、洪水の來りて悉く滅ぼすまでは知らざりき」。此の世の生活に追はれ、此の世の習慣に捕はれ、世間のするやうにし、世間の思ふやうに思ひ、遂に社會が破壊され、荒廢されるまでその事を知らなかつたのである。獨りノアは神を信じて世間を信じなかつた。而して彼とその子孫のみが生残つたのである。多分洪水の來る前は變人と稱せられ、生活にも苦しんだであらう。今に至つて「之によつて世の罪を定め、また信仰に

由る義の世嗣となれり」(ヘブル書一・七)である。

アブラハムは當時世界で文明の最も發達して居たカルデアのウルに住まつて居た。今で云へば倫敦、巴里、紐育に居た。然るに彼は神に召され、「嗣業として受くべき地に出で往けとの命に遵ひ、その往く所を知らずして出で往き」、ハラシを経でカナンに至り、人なき異境に寂しくその妻と子と共に住んだ。支那、滿州の内地か、シベリヤの曠野に似た地に住んだのである。而して彼の裔は今に至るまで絶えず、その民族程人類の運命に多大の關係を有した者はない。

モーセも亦エジプトの王宮に在り、權勢と榮華を受くる事を欲せず、ミヂアンの地に羊を牧して暮した時、エホバを知り、イスラエルの建國の祖となつた。

北米合衆國の建國史も亦之に似て居る。英國の清教徒が信仰を維持するため、故國を離れ、寒冷

にして且つ野蠻人の來襲に脅かされる原始林に移住した事から創まつたのである。

彼等は皆文明の反逆者であつた。それが與へる物質的安易、享樂の拋棄者であつた。その學問知識の否認者、そして世の人の迷信とし、阿片とする天國の確信者であつた。彼等は此の世に在つて旅人の如く一生を過した。然かもその後裔が此地の主人となつたのである。世捨人にして世に捨てられた者、「造家者（政治家、社會改革者、教育者等）の棄てたる石は、これぞ隅の首石となれる」である。人類家族の大黒柱となつたのである。

此の世に於て位置高からず、富まず、貧しく、人に使用され、賤げすまれ、塵埃の如く思はれて、然かも一番高い座を占める。これが天國の民である。我等である。

祈つて其の效驗ありや

問、宇宙は洪大、我等は微小、我等の切なる願と雖も大宇宙より見ば一瞬に過ぎ去るつまらないもの、されば我等の祈は聽かれるか。

答、聽かれる。神は宇宙の創造者にして宇宙以上にならんと共にその凡てを知り、その凡ての中に在す。神はエーテルの如く宇宙に薄く廣がるにあらず、圓周のない圓の如く、ここも中心である。さればいと小なる我等の苦惱を感じ給ふ。

問、自然の秩序は嚴然として存在し、法則は破るべからず。神はこれを無視して我等の祈を聽き得るや。

答、自然の法則とは人が認めたもの、自然は流動體であつて、常に變轉して居る。法則と見ゆるのは神の行動の習慣である。神は人と同じく必要あらば習慣外の行動をもなし給ふ。

神を求むる心 (中)

江原 萬里

一 己が生命を完うせんとの願

(前號つゞき)

然るに現代的教育を受けた多くの者は世の進歩、殊に科學の發達を過信して宗教を迷信なりとし、之は徒らに來世の夢を説いて現世的諸改革の熱心を起さしめず、此世の苦惱を取り去るにあらずして只一時の氣安を與へる阿片であるとす。彼等は人間の知慧に由つて科學に由つて世は次第に善くなりゆくものと信する。今日よりも明日を信する。明日は人類の四大敵なる饑饉、病患、貧乏、戰爭を悉く科學によつて克服し得ると信する。あゝ然し明日はいつまでも明日であつて今日にならない。我等は今日満足を得なければ、何日に

なつても満足は得られない。神を迫放したりと云ふ社會は果して之に代へて我等を満すものを供したか。そも世は次第に幸福に向ひつゝあるか、我等相互の恨み憎みは一掃せられたか、一切の人生の苦惱は精銳なる武器を造り得た科學の發達に由つて除かれるであらうか。

若し近代に於て現世的幸福の最寵兒は誰ぞと云はゞ恐らくはゲーテ以上の者を擧げることには困難であらう。稀世の天才、屈指の大詩人、大思想家、大學者、而してサクセン公の殊遇を受けて國務大臣、樞密顧問官を兼ね、名聲天下に普く、賞讃者常に絶えず、八十三歳の高齡を保つて、世界の人に惜しまれつゝ安らかに死し、死後百年の今年三月地球上到るところに記念せられ、その餘榮今尚絶えない。然かも此程の運命の寵兒にして次の嘆聲がある。

人は常に余を呼んで運命の最大寵兒といふ。余

自身も今日取り来りし途に就て、彼是苦情を言はうとは思はない。併し實際のところ、苦勞と心配との外何もなかつた。余の七十五年の全生涯中眞に樂しかりし時とは、唯の一日もなかつたのである。(藤井全集第五卷二四〇頁)

Was sind diese Leiden und Schmerzen? 此等の悲しみと痛みとは何ぞやとは彼の終生の嘆聲であつた。

何故人はかやうに苦しみ悩むのであろうか。生命を完うせんとの念は鳥獸にもある。然るに人間にのみ斯くの如き苦しみのあるのはそも何故か。それはカーライルの云ふ如く「人間の不幸は人間の偉大から来る」からである。人にはいくら所有を増し、健康を興へ、その胃の腑を飽滿せしめても、それで尙ほ満足の出來ない大なる空虚がある。「靴磨きに宇宙の半分を興へて見よ、次の日には他の半分の持主と相争ひ、自分程不當な待遇

を受けて居るものはないと云ひ出すであらう」とカーライルは云つた。人には胃袋以外靈魂がある。靈魂は神を得ずば満足しない。

されば人がかくあらねばならないとする自己は無限の自己である。然かも我等は現在極めて限られて居る。己が不幸、窮厄を省みれば省みる程、我等は益々かく有らねばならずして、かくあり得ない自己を嘆じ、その窮乏に悩むのである。

此の故に我等の世に在る不幸は決して無意味なる悲しみ哭きではない。これは家を離れ、おちぶれて江湖に流浪する薄兒の遙かに元ありし我等の靈魂の父の家を想ふ悲嘆である。それは望なき嘆ではない。社會改良家が最も苦心するところは、子々孫々貧民窟に生立ち眞人間の生活の如何なるものであるかを知らない乞食、浮浪人に、如何にして己が現狀に不満の念を起さしめるかにあると聞く。人の糞を食つて生きる豚に悲嘆はない。我

等に不幸あり、悲しみ嘆きある事は神を求めむる心を起さしめ、神によつて満される望を起さしめる。人生の悲痛に泣く者よ、此の事を想へ、

平安を求む

されど我等に不幸山積し、患難又患難、引續く災禍の大波に翻弄されては我等の心は少しも安きを得ず、人生の戦に敗れ、身も心も倦み勞れては、願ふところは此の世と離絶して只そつと、どこか音なく静かな處に住み度くなる。

われ云ふ願はくは、鳩の如く翼あらんことを
さらばわれ飛び去りて平安を得ん。

みよわれ遙かに逃れて野にすまん (詩五五)

祇園精舎の鐘の聲に諸行無常の響き聞き、沙羅雙樹の花の色に盛者必衰の理を思ひ、此の世の榮華は夢の如く、義理と人情との葛藤に悶ゆるあれば、無情冷酷に泣くあり、義者に義しき報あらず、身は業病に惱み人に棄てられてはヨブの如く只永

遠の眠のうちに平安を求めむ。

何とて我は胎より死にて出でざりしや。何とて胎より出でし時に氣息たえざりしや。如何なれば膝ありてわれを接けしや。如何なれば乳房ありてわれを養ひしや。然らずばわれ臥して安んじかつ眠らん……かしこにては悪しき者虐げをやめ、倦みつかれたる者やすみを得……如何なれば艱難に在る者に光を賜ひ、心苦しむ者に生命をたまひしや。……我は安らかならず、穩かならず、やすみを得ず、只なやみのみ來る (ヨブ記第二章)

かく我等は患難に遭うて心の平安を求め、遂に或る者は寂滅に安心を見出さんとする。然るに我等の受くる患難の原因が單に我等の煩惱、迷でなくして、我等の意志に内在する罪に在る事を深く感じた者には、肉體の安易も、心の空寂も、靈魂に少しの平安を供しない。只義なる神が己と和ら

ぎ給ふにあらずば、我が靈魂は永遠の暗黒に呻く者なる事を感じる、平安はこの罪の赦し以外になき事を知り、罪を贖罪わがなふ神を求めると至る。

發達を求む

然らば我等の靈魂はかゝる神を知り、神にその罪赦されて滅びの恐怖より免れ、眞の平安を得たならば、それで満足するかといふにそうでない。

我等は更らに己が生命を大に發達せしめ度く願ふ者である。我等は蓮の實を食ふて安逸、無爲、懶惰に暮し得る國を欲しない。我等は苦しみの中に在り乍らも、よくも満足せる豚に生れて來なかつた事を喜こぶ。我等は「罪のはかなき樂を受けんよりは寧ろ神の民とともに苦しまんことを善しとし、キリストに因る誘そりはエジプト財寶にまさる大なる富と思ふ」(ヘブル書二・二六)

されば我等は心に一度眞の平安を得るや、更に已に賦與せられた能力を發揮し、委ねられたる天

職を完うせんことを願ひ、假令、憂き事の尙此の上に積るとも、己が一生はよく之に耐え、よく之に打ち克ち、己が生涯に光輝あらしめんことを欲する。誠に我等は大なる理想を抱懷する。之が達成せられない限り我らの心は安息を得ない。

それ故に我等は聖くあらん事を願ひ、愛せん事を願ひ、智くあらん事を願ふ。その爲め我等が切に求むる神は我等の生命を護り給ふのみならず、又聖き神にして我らを聖くし、愛の神にして我らを愛の人たらしめ、眞理の神にして我らに眞理を知らしむる神たらんことを願ふ。我等はかゝる神を求めつゝある。

然かも此の事は單に我等が之を意識して求めて居るばかりではない。我等の本能も亦之に向ふやうに造られ、我等は無意識中に、かゝる神を求めそのうちに安息を得るまでは安息を得なくされて居るのである。

二 聖くあらんと願

我等の心は多岐多様甚だ複雑である。我等に自己を護り之を高めやうとする心があると同時に、丁度その正反對に、自己の無力、無能、卑賤、醜惡を恥ぢ、己れよりも偉大なるものを尊び、之に己を捨て、服従しやうとする本能がある。

かくて幼き兒らは父母に服ぶを喜び、小學生が學校の教師を世界にて此程の物識りはなしとし、長じては先輩に服ひ、その指導を仰ぎ、君に仕へて、そのためには身を献げ、死をだに厭はない。この心が我等をして聖き神を求めしめ、我が意にあらずその御意に服ひ、神の聖きが如く己も聖くあらんと願はしめる。

私は學生時代カーライルの「衣裳哲學」を讀み今尙忘れぬは、その主人公が母の日常のうやうやしき容貌、動作からして神を學んだ記事である。

彼は云ふ。自分の幼小の時には母以上の崇い者は世界何處にもないと思つた。然るに此の地上で私の知つた一番崇い者が、言ひ知れぬ畏れおのゝきを以て、天に在す更らに崇高なる者の前にひれ伏すのを私は見た。「かゝる事は殊に幼き者に取つては、自分の存在の骨髓にまで奥深く入るのである。そして妙に奇しくも心の神祕なる深みの中に、神を知る至聖所が建設せられ、それが外から見えるやうになる。人間のうちの最も神々しきもの、即ち、うやうやしさがその賤しい包装なる恐怖のうちから芽生えるのである。君は假令粗朴であつても、天に又人のうちに、神のいまし給ふことを知つて居る百性の子になる事を願はないか。それとも自分の家の紋章の由緒だけしか知らない公爵の子になり度いのか」と。

何物のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるゝ。

實に我等は偉大なる天地、洪漠たる宇宙、その中に秘められたる智慧、能力、壯美を見て、心は自ら敬虔に、頭は自ら下るのである。「頭上に輝く諸星と、我が中にある道徳律」は偉大なる哲學者カントをして年の進むに従ひ益々畏敬の念を生ぜしめた。ペテロはイエスの聖に接して、己が醜惡に堪えず、「主よわれを去り給へ、我は罪人なり」と云つてその前にひれ伏した。

かくの如く我等は偉大の前に額づく畏怖、畏敬の念よりして測り知られざる智慧、無限の能力を以て此の洪大無邊の天地を創造し、支持し、攝理し、又我等自身の運命を掌り給ふ大能の神に跪くのである。絶大の愛をもて我等の罪を赦し、我らを潔め、之を完成し之に永生を與へ給ふ如き聖にして聖なる神を慕ふ。虫にも劣る我が意に執着し、塵にも似たる己が身を立て、蜚蜚の如き生命を保たんよりは、カルピンが云ふ如く、かゝる神

を知り、彼に一切を委ね、身命を擲つて其の聖意を實行する者とならば、之にまさる無上の光榮はなしと思ふに至る。

その爲めに己が生命を失ふ者は、却つて己が生命を全くし、己が生命を護り之を保たんとする者は、却つて之を失ふ（マタイ傳一〇・三九）。人生のパラドックスはこゝにもある。然かもそれは不自然でなく、我らに生命を保たんとする本能があると同時に己が小を恥ぢ、偉大なるものに從屬せんとする本能があるからである。

三 愛せんと願

かく我らは一方には先天的に利己的であつて、己が生命のために思ひ煩らひ、之が危難を避け、平安を求め、己を立て、己を大にし、其の勢力を増し度く願ふ側、我等は我意を捨て身命を擲ち、我よりも更らに大なる者に服ひ、その命を喜び、

己を捨て、それに仕ふる事を無上の光榮とする願がある。矛盾と云へばこれ程の矛盾はない。人の心は複雑である。然れども不統一とならない。己が生命を神のために捨つる者こそ、それを獲得し、之を保たんとする者は却つて之を失ふ。これ人生のパラドックスである。然るに、それにも優りて人生には尙も大なるパラドックスがある。それは人は生れ乍ら愛情を有する事から来る。

愛の本能は必ずしも人の専有物ではない。動物にもある。されど人に至つて最も顯著である。子が病む時、その安危を氣づかひて終日終夜枕頭を離れずして看護し、雨の夜雪の日、家を去つた放蕩息子の身の上を思うて心を痛める母性愛。

やさしき心をいちはやく捕ふる戀は、

麗はしき我身によりてこの人を捕へ、

我身はわれより奪ひ去られき。

そのむごたらしさは忘れられぬ限りなり。

思はれて思はぬものなき戀は、

なんぢ見る如く今尙ほ我を去らざるほどの

彼への強き愛着をもて我を捕へき。

戀は我等をみちびきて共に死なしめき。

(生田譯 神曲地獄篇)

と歌ひ千歳の後、尙ほ人の同情の涙をそゝる男女の戀、

わが頭を水となし、我が目は涙の泉ならまし、

我が民のために日夜嘆げかん (エレミヤ九・一)

と云ひし愛國者の憂國。

兄弟ヨナタンよ、われ汝のために悲慟しむ。

汝は我に大に樂しき者なりき。

汝の我をいつくしめる愛は尋常ならず、

婦おんなの愛にも勝りたり (サムエル後書一・二六)

と歌ひ、親友ヨナタンの死を悲しむダビデの友愛。

凡そ愛程奇妙なものはない、又矛盾せる者はな

い。何となれば愛は極端なる利他であり、且つ同

時に極端なる利己であるからである。

純なる愛は何人も知るやうに、己が愛する者のために己が全部を献げ、そのために艱難辛苦を辭しない。愛する者の善からんためには、パウロの云へる如く、「凡そ事忍び、お、よそ事信じ、お、よそ事耐へる」(コリント前書一三・七)。

然るに愛は他方には極端なる自己中心である。愛が本眞劍であればある程、己が愛する者を己が者とし、その中に自己を見出し、自己が生くるまでは満足しない。愛は愛する者の身も靈魂も悉くを己が物とし、之を獨占する迄は安んじない。プラトンが云つたやうに、愛は貧窮せる靈魂が寶物を探し求めるやうに貪るものである。その父は王なれど、その母は乞食である。

かく愛には極端に己を最も善きものにせんと願と、他方己を捨て、愛する者のためには如何なる苦難をも甘受しやうとする、二つの矛盾した方

面がある。之が愛のパラドックスである。愛の追求するものは結局美はしき者を求め、之を愛し、之に愛せられ、いつまでも離れる事なく、之と一體となる事である。こゝに己が生命を完うせんとする願は、己を捨て、愛する者のために仕へんと願と一致する。利己心は完全に利他心と一つになる。生命を得んとして之を棄てるのは眞に之を棄てたのではない。愛する者に愛せられて、そのために己が生命を棄て、こそ、眞に棄てたのである。そして愛する者の中に眞に自己を見出し、己が生命を得たのである。

愛せんと願はかくまで己を愛する者を求め、又かくまで愛せらるべき者を求める。愛が高められ、深められ、潔められて、益々純に、益々美に、益々崇くあらんとして、我らはかゝる愛の神を求め、愛せられ、愛せん事を願ふ。

我等は我等のためには十字架の苦難をも忍び、

我に己が生命を與へ給ふ神を求め。我等は又他方、我が愛の全部を要求し、

我よりも父または母を愛する者は我に相應しからず、我よりも息子又は娘を愛する者は、我に相應しからず、又己が十字架をとりて我に従はぬ者は、我に相應しからず

(マタイ一〇・三七—三八)と云ひ給ふ「嫉む神」

(出埃及記二〇・五)を求め。而してその愛に感じては、如何なる困苦も厭はず、鼎鏝も甘き事餽の如く、人生のあらゆる苦難に勝ち得て餘りあらん程なる愛が我に生ぜん事を求める。

我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、劍か、録して「汝等のために、我らは終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと爲られたり」とあるが如し。然れども凡てこれらの事の中にありても我らを愛したまふ者

に頼り、勝ち得て餘あり。われ確く信ず、死も、生命も、御使も、權威ある者も、今ある者も、後あらん者も、力ある者も高きも、深きも、此の他の造られたる者も我らの主キリストイエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざる事を。(ロマ書第八章)

然かも此の愛なる神を愛する途は如何。遁世して山に隠れ、日々行ひすますことか。否我等の求むる神は「わが愛に居れ、なんぢら若し、わが誠命をまもらばわが愛に居らん。……わが誠命は是なり。わが汝らを愛せし如く、互に相愛せよ、人その友のために生命を棄つる。之より大なる愛はなし。(ヨハネ一五・九一三)と云ひ給ふ神である。我等の眞に求むる神は、我等が我等の周圍に在る我等よりも貧しく、憐なるいと小さき一人を愛し、そのために勞し、そのために生命を棄るとき、これをこそ神を愛する者となし給ふ神である。

わが父に祝せられたる者よ。來りて世の創より汝等のために備へられたる國を嗣げ、なんぢら我が飢えし時に食はせ、渴きしときに飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、裸なりしときに衣せ、病みしときに訪ひ、獄にありしときに來りたればなり

かく云はれて「主よ何時なんぢの飢えしを見て食はせ、渴きしを見て飲ませし、何時なんぢの旅人なりしを見て宿らせ、裸なりしを見て衣せし、何時なんぢの病み、また獄に在りしを見て汝にいたりし」と云へば、之に答へて

まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと小さき者の一人になしたるは即ち我に爲したるなり。(マタイ傳二五章)

我等は我らにかく云ひ給ふやうに愛の神を求めて已まない。

(以下次號)

エ レ ミ ヤ 記 の 研 究

陶工と陶土(上)

江原 萬里

神殿は盜窟

ヨシア王の大改革は、メギドンに於ける王の戦死と共に全く失敗に歸した。國はエジプトに隸屬せしめられ、後主はエジプトに捕囚となり、次の王エホヤキムは無情冷酷にして民の苦痛を顧みず、却つて豪華なる宮殿を造營して民をして塗炭の苦を嘗めしめた。ユダの前途は甚だ暗くなつた。今となつて國民の頼むところは只一つ。エルサレムの神殿あるのみである。若し此の最後の據り處にして破壊されんか、國民は最早や往く所を知らない。神殿。神殿。頼むところは只之あるのみ。

然るにエレミヤは全國民の前に、モーセの權威

と、イザヤ以來の預言と、ヨシア王以下舉國一致して尊崇する神聖極りなき此の神殿を、「泥棒の家」と呼び、「エホバも亦かく見給ふなり」と叫び、その廢墟となる日の遠からざる事を預言したのである。之を聞く者皆切齒扼腕、彼の肉を食はんと欲する迄に憤激した事は想像に難くない。

何故にエレミヤの眼には神聖無比とされた神殿が「泥棒の家」と映じたのであるか。何故に之が廢墟となると考へたのであるか。解答は簡單である。それはエレミヤよりせば、此の神殿尊崇は一つの大きな國民的僞善、組織化されたる虚偽以外の何物でもなかつたからである。こんなものに頼る國は到底永續し得ない事は、明明白白であつたからである。彼が自ら經驗し、確信するところに由れば、眞の神を拜し奉る場所は神殿ではない。各々の眞心である。神に仕へ奉る道は、盛んに儀式を舉行する事ではない。至純の道德を以てする

ことである。

勿論改革の最初、熱心に之に賛成したエレミヤは、神殿に於ける禮拜其の物を否定したのではない。然し乍ら、若し眞心のうちに神を拜せず、至純の道德を以て之に仕へ奉らずば、而して汚れたる心を以て神殿に集り來り、惡しき祈願をこらすならば、如何に壯麗なる神殿も「泥棒の家」に過ぎない。如何に崇嚴なる儀式も僞善である。かゝる宗教は虚偽である。ごうして虚偽が神の創造の世界に永續することが許されやうか。

一國の政治家たる祭司たちは、國民が擧つて神殿に集り、相一致して盛んに儀式を舉行する様を見て、國民の團結の實舉り、宗教は大に興り、國は完全に統一され、強大となり、繁榮するものと思つた。然るにエレミヤの眼には、それが何の一致であらう。預言者たちは、國民的社會的宗教の制度が完備し、その組織が整頓せば、それで神と

民との關係は義しくあり、國民的生命は充溢するものと思つた。エレミヤの眼にはそれが何の生命であらう。

祭司たち、預言者たちには形式が即ち生命であつた。故に、外に顯はるゝ一定の規則的行爲がなければ、彼らには宗教はあり得なかつた。一定の神殿、一定の儀式、一定の行爲、之なくして神は拜し得なかつた。かゝる禮拜の一定の形が整ふて、始めて神は存在し、その神が彼らを護り、福祉を降し給ふと思惟したのである。若し此の禮拜なくば、彼らには最早や神は存在し得ない神であつた。

それ故、彼等の神は彼らが熱心に祀つて差上げる間は、彼等の神であり給ふ神であつた。か程まで熱心に祀つて差上げる國民に、如何で神が怒り給ふことあらうぞ。又此の崇嚴なる神殿と儀式とがあつて始めて存在し給ふ神が、如何で彼らの不義を罰する爲に、己が存在の基礎である神殿を廢

墟とし給ふ事があり得やうぞ。盛に宮詣をなし、神佛に祈願をこめる現代の信者の宗教も亦此に異なる處はない。宜なる哉、宗教を阿片と嘲ける者のあるのは。エレミヤも亦その一人であつた。

イスラエルの民は申命記改革に由つて外形的には立派なる國民的宗教を有つ事となり、表面上敬虔の民となつたが、その心は却つて神から遠ざかり、眞の信仰を失ひ、邪しまなる己が心に由つて立つ者となつたのである。イエスがイザヤ書を引用して言ひ給ふたやうに、「この民は口唇にて我を敬ふ。然れど、其の心は我に遠ざかる。たゞ徒に我を拜む。人の訓諭を教として教へて」(マタイ傳一五・一)としてバリサイ人がイエスを冒瀆者として迫害したやうに、職業的宗教家なる祭司たち、正義よりも國を愛する預言者たちは、大不敬漢、國體の尊嚴を傷ける大國賊として、エレミヤを迫害したのである。

當時の最高信仰

然し乍ら無智なる民衆と、これを代表する坊主根性の祭司とは兎もあれ、一國の實權を掌握する主たる祭司、殊にイザヤ以來の傳統的預言の流を汲み、申命記改革を遂行したユダ國中の最有識者たる預言者たちの中には、立派なる人物も少なくなかつた。彼らの宗教心は決して無智なる國民のそれではなかつた。然るに彼らが悉くエレミヤとその所見を異にし、國の滅亡を預言したエレミヤを國賊と斷定したことは、何か深い理由がなければならぬ。而してそれは明かにあつた。

抑も、イスラエルの民は他の民族とその生立ちを異にし、エホバが特に之を選別して神の民とし、神のために特に崇高なる任務を擔はしめ給ふた者であるとは、古來イスラエルの民全體の不動の信念であつた。「我れは永遠に汝らの神たるべ

し」とは、その祖先アブラハム、モーセ、ダビデ等に對するエホバの約束であつた。それ故に彼等に對する神の恩寵はいつまでも盡きないと確信したのであつた。

而してその信念は彼らの過去の歴史に由つて確證された。神はイスラエルの民を困窮の日に顧み給ひ、之をエジプトの鐵鍋より引出し、「乳と蜜」との流るゝカナン之地」に導き入れ、四方の敵を追ひ拂うて、此の國土を永遠に彼らに與へ、赫々たる戰勝と熾々たる平和繁榮とを齎らしめ給ふたのである。

されば周圍の民族の中に如何なる擾亂が生じ、その町は破壊され、その國は滅亡されても、獨りエルサレムのみは、永遠に神の都として、神之を守護し給へば、他國民の窺竄を許さない。律法はシオンより出で、諸國民を教へ、萬民等しく之を仰ぎ、鼓腹擊壤以て泰平を謳歌すべき日のやがて

到來するであらうとは、彼らの希望であつた。偶々アツシリア王が侵入し來り、エルサレムを包圍し、イスラエル民は危念存亡の秋に遭ふや、神は大なる御手を以て彼らを護り、國難より彼らを救ひ給ふたのである。

エルサレムは難攻不落、それは神がその約束に忠實であり給ふからであるとは、彼らの父祖傳統の信念であり、過去の歴史の確證するところであり、而して又ヨシア王の申命記改革が此の信念を益々強めたのである。今ヨシア王がメギドンに於て一敗地塗れ、國難再びユダ國を覆ひ來た。倚り頼むところは實にアブラハム以來のエホバの約束以外になかつた。神殿崇拜も其の源はそれから發したものであつた。

イスラエルの民は神の契約による民である。故に神は決して國を滅ぼし給ふことはない。若し然らずば、エホバは約束に不實の神、虚偽の神であ

らねばならない。又彼等の倚り頼む神は無能無智、天地を創造し、全人類を支配し給ふ神ではない。故に國が滅ぶなど云ふ者は神を神とせざる大不信仰、大冒瀆である。是れ國中の善良なる有識者の悉く懷いた宗教心であつた。その内に深い真理がある事を誰か否定出來やう。神が神であり給ふならば、その御意は必ず成る。如何なる人間も之を妨げることは出來ない。之れ必ず真理であらねばならない。

國民の罪の事實

然るにイスラエルの眞の神エホバはエレミヤに命じて、國民の此の信念に反し、國はその民の罪のために滅ぶべきことを預言せしめ給ふたのである。加之、神はエレミヤに命じて、農村に、又首府に、親しく國民の腐敗の状態を視察せしめ給ふた。その結果、彼は國民が底ひも知れぬ罪へ墮落

して居る事實を發見して、國の滅亡は當然である
ことを確信するに至つたのである。

二七 われ汝を我が民の試金者とし

彼らの道を究め驗さしむ。

二八 彼らは全く手におへぬ代物

讒誣を商ふ行商人か、

すべて眞鍮と鐵にして、

腐れ果て、生命なし。

二九 ふるごは強く吹きつけぬ。

鉛は熔けて消え失せぬ。

熔鑛夫の精煉は無駄となりぬ。

彼らの鑛滓は取去られず。

三〇 廢銀とこそ人は言ふべし、

エホバ彼らを廢棄し給へば。(第六章)。

エホバはアブラハムに、若し十人だに其の中に

義人あらばソドム、ゴモラを滅ぼさじと云ひ給ふ
た。(創一八・三三)。エレミヤは鑛石の試験者とし
て、若しや幾分にも國民中に神の民としての純
粹なる銀が交つてゐはせずやと思ひ、それを選び
出し、國の中堅たらしめやうと試みた。然るにそ
の精鍊は全く無駄に終つた。國民は悉く腐敗し、
純なるものは一人だにない。若し有りとするも、
不純の者と混和化合して、それからの分離は不可
能である。結局全部廢棄されなければならなくな
つて居るのを知つた。さらば亡國以外に何があら
うか。

神は祖先に此の國の永久存在を約し給ふた。さ
れど國民の罪が亡國を招致することは疑ふことが
出来ない。それはエレミヤに取つては理論ではな
かつた。親しく人生の事實を觀察し、經驗から歸
納した確信であつた。此の點が明白に彼と正反對
の立場に在るユダの全宗敎家と異つた彼の特色の

一つであつた。彼は飽くまでも事實の人であつた。彼の神は理論ではなかつた。實際に彼の心に於て親しく交はり、その御聲を聞き得た神であつた。

又その御聲は彼自身の主観的なる聲ではなかつた。天然を通じ又人生を通じて事實となつて顯れる、客観的實在の聲であつた。「天然の堅き基礎の上に、永遠に築く者は頼る」(内村鑑三著宗教と現世九二頁)とは、彼に於て眞であつた。彼の宗教は理論の宗教でなく、實に事實の宗教であつた。

彼は事實上、國民の心は既に遠く神より離れて頑迷不靈となり、靈的白痴となつた事を知つた。神の言が人に傳へられる時に、人は必ずしも之を喜び受けるものでなく、必ずしも悔改めて善人とならない。如何に説教するも人は必ずしも眞の神を信じない事を知つたのである。

福音が世に宣傳へられて以來千九百年の今日に於ても亦、之を聞く者多きも信する者は少ない。

信じたりと云ふも、多くはその心が革まらない。悪人が善人とならないのである。悪人はいつまでも悪人にして、假令福音を聞き、信者と自稱すればとて、否そうすればする程、却つて隱嶮なる悪人と化するのを見る。是れ實に悲しき事である。然かも理論ではない。人生の事實である。彼は親しく之を経験したのである。

エテオピア人その皮膚の色を、

豹その斑點を變へ得るか。

若し然せば汝ら善をなさん、

惡に馴れたる汝なれど(一三・二三)

全然不可能。事實は明かに之を示す。ユダの國は滅亡以外にない。然し乍ら宗教上こゝに大問題がある。

(以下次號)

正 誤

前號「神を求む心」中アウグスチヌスの言「されど」は「されば」の誤植。

洗者ヨハネの疑問

森本慶三

洗者ヨハネが獄中より其弟子を遣して、汝はキリストなるかとイエスに問はしめたることは、一見不審に意はれます。ヨルダン河畔に親しく天來の靈聲に接して、こは我心に適ふ我愛子なりと示され、世に向つては之こそ世の罪を負ふ神の羔なれとして推舉紹介したる彼にして、今更イエスに對して懷疑の眼を放つとは何故であるか。獄中の苦がその心の明を蔽ひしものか、否々風にそよぐ岸邊の葦ならぬ彼にして、安ぞ一身の艱の爲に心を動かさるゝことがありましやうぞ。むしろこれはもつと深い、もつと廣い立場からして、一片の疑雲が起り來つたものであらふと思はれます。それは即イエスの爲されつゝある救の意義性質につ

いてであります。

彼は聖靈と火をもて汝等にバプテスマを施さん………殻は消えざる火にて焼きつくさん。と群衆を戒めたる語の中にも見ゆる如く、イエスの救とは一面火であり、審判であり、刑罰である。義者と不義者との峻別である。イエスはかゝる審判主として其義しき斧を振ひ玉ひ、悪人は直に斥けられて、神の國は即時に到來すべしとはヨハネの所信でありました。然るにイエスの爲し玉ふ所を見るに、僅に病者を癒し、悲しめる者を慰め、諄々として靜に教を説き玉ふのみである。暴君ヘロデの横虐淫蕩をも別段懲罰し玉ふ様子も見えず。遊女、税吏をその身邊に近づけ、バリサイ人の家にも招かるゝまま自由に出入し玉ふ。傷める葦を折ることなく、煙れる麻を消すことなく、破邪顯正の快手は更に見るよしもなし。あゝこれ果してキリストなるか、期待されし神の國はかくの如く

洗 者 ヨ ハ ネ の 疑 問

にして來り得べきか。己は預言者の最後、來るべきメシヤの前驅者として、目親しく救主を仰ぐの特權と光榮に與り、其代の中に神の國の完成を見るべきものと思へるに、あゝそもこれ何たる事であるぞとは、決して單に利己的な心情であるとは言へませぬ。むしろ義人には共通な心事であります。主よ何時まで地に住む者を審判せず、且これに我等の血の報をなし玉はざるか（黙示録六ノ十）、とは神の國を切慕し、神の義の顯れを朝夕祈求せるものには何人にも自然に口に出づる願であります。預言者の心は殊に此情に燃えること、思ひます。まして預言者中の預言者、今眼前主を眺めつゝあるヨハネに取ては當然すぎる程であると思はれます。復活の主を仰ぎたる弟子達は、直に主に向て「主よ汝今國をイスラエルに還さんとするかと問ひました。かくの如く神の國を翹望せる聖徒にとりては、主を見ることは直に神の國の到來、

即正邪の大審判を豫想せざるを得ないのであります。いと小さき我等にありても、人の世の善惡混沌、否むしろ惡の勢力旺盛にして正義の聲が徹せざるを見ては、彼等と等しく主よいつまで我等は待つべきかと焦燥煩慮せざるを得なくなりませぬ。聖徒のこれからの疑問と熱禱に對して、主は如何に答へ、神は如何に爲し玉ふのでありませぬか。かの時イエスは相變らず病者を癒し、奇蹟を行ひ、福音を説き玉ふの外何をなさず、我救は是なり、此外別に救なし、返りて此事をヨハネに告げよ、凡て我に躓かぬ者は福なりと示し玉ひしのみでありました。ヨハネが之を受けて悟得し、之を以て満足せしや否やは、聖書の記事によりては知る由ありませぬが、多分彼は之を理解し、晏如として神の聖意を信受したであらふと想像されます。かの祭壇の下の誡られたる靈魂に向ても、神は其使を送て「彼等と同じく殺されんとする兄

弟等の數の盈つるまで安んじて暫く待つべし」

(黙示録六ノ十一)と諭し慰め玉ひしと記されてあります。人は義憤と思ひながらも、いつしか其中に復讐報復の念が潜在するを禁じ得ません。悪人の所罰を見ては窃に痛快の情を感じ易くあります。が、神の聖旨、イエスの心情は遙に之に異なり、一人の亡ぶるをも望み玉はず、七度を七十倍するの赦を與へ、己を刺す者の爲に祈り玉ふ程、極度の寛容仁慈を顯し玉ふのであります。審判とは極刑を以て之を苦しむることなく、無限の愛を以て悔改を迫り玉ふことである様です。恐しき刑罰を以て臨むにあらずば、人は容易に罪を離るゝものでない様に思はれ易くありますが、實は恵に感じて惡を止むる方が、遙に根本的であり、徹底的であることは、少しく人生の實情を至細に考察するとき、吾人の屢々經驗目撃するところであり、刑は益峻嚴を加へて、犯罪愈多く、法三章

に止まつて、天下始て安し、無爲にして化するものこれ聖人の政であると言はれます。まして至聖至仁なる父なる神の法に於ておやです。近代の刑法が成るべく死刑の慘苦を輕減せんことを勉め、更に進では死刑そのものを廢止せんとしつゝあるを見て、人の心が神に近づくほご生命を尊重する様になるものであることを示します。永遠の火の中に惡人が絶滅さるゝと想ふのは、義人の眞情かも知れませぬが、未だ舊約的にして決してイエスの心ではありません。人の怒は神の義を行はず(ヤコブ二ノ二〇)といふのは、これ神の義そのものゝ何であるかを充分に了解せないからであると思はれます。

我等は屢義と愛と稱して二つを區別しますが、實はこれは同一物の兩面であつて、二つの異なつた存在ではないと思ひます。神が惟一であり、主が御一人であり玉ふ如く、その屬性たる義と愛

との二つは異りたる二つの源泉より來る別個のも
 のではありませんまい。憤怒の神と、慈悲の佛とを
 別々の存在者と見て居つたのは、不完全なる神觀
 からでありました。イエスに於てこの二つの屬性
 は完全に調和融合したる姿を以て始て人に示現さ
 れたのであります。イエスに於て義は愛に包まれ
 て居ります。愛は義と化合して居ります。これは
 もはや二つに離しては共に其意義作用を全くし得
 ないほど親和して居ることを見せしめられます。
 義即愛、愛即義といつてよいと思ひます。従て義
 の實行即審判も、之を愛と離して考へることは出
 來ないと思ひます。審判といひて之に苦刑ことに
 硫黄の池とか、地獄の火とかいふ如き人間の考へ
 得る最も恐しき慘酷極まる光景を想像せしむるこ
 とは、イエスの精神ではないと思ひます。勿論新
 約にも、ことにイエス御自身の教説の中にも、こ
 れに類したる言辭のあることはいなまれません。

併し之を信解曉得するには矢張りイエスの愛の御
 心を以てせねばならぬと思ひます。罪人たる人間
 の受くべき最大苦刑は已に十字架に於て至れり盡
 せりであります。神は罪人を、然りイエスを信ぜ
 ず之を拒み之を殺したる極悪人をさへ、十字架上
 のイエスの御祈りの故を以て、寛大に處置し玉ふ
 と信すべきであると思ひます。曩年岡山に開かれ
 たる再臨問題講演會に於て内村先生の語られたる
 辭の中に

「余は思ふ。キリスト再臨の日に於て、その初
 臨の時と等しく、又世の多數が之を拒んだなら
 彼らに一度苦難の途を取り玉ふやも知れず。丁
 度岩が溪流を遮れば、水は岩に碎かれつゝも、
 之を廻つてまた流れ下るが如く、神は幾度でも
 手を更へ、途を變じて、萬人を救に導き玉ふや
 も知れない。再臨とは恐しい事ではない。救の
 爲の喜ばしい音信である云々」

かの十字架上にあの絶愛の祈を捧げ玉ひしイエスが、終りの審判の日には、極刑を以て臨み玉ふと思はれましやうか。在世三年間は赦しの主であつて、再臨の主は恐しき刑場の獄吏であり玉ふと見るのが適當でしやうか。これも嘗て内村先生より聞きたることではありますが、

「審判とはキリストが爲し玉ふと聞きて、そのいかに有難く、やさしいものであるかが窺はれます」

と、我も實にそうであると思ひます。

勿論イエスの愛は老婆の溺愛、舐積濫愛でないことは言ふまでもありますまいが、イエスの審判の義は決して愛とは無関係でなく、否愛と離すことの出来ぬものであることを我等は學ばねばならぬと思ひます。イエスを受けざりしサマリヤの村人と向て、天火を下して之を滅さんと望みし弟子に對し、「汝等はおのが心の如何なるかを知らず

それ人の子は生命を亡ぼさん爲に來らず、救は人爲なり」(ルカ九ノ五五)との言を以て、其心得違を戒め玉ひし主イエスの海の如き寛容には、到底人間の容易に窺ひ得ざる深さがあると思ひます。人の罪を赦せよは、イエスの教の心髓であり、根底であります。神の國の迅速なる實現を豫想して、義に燃えし預言者ヨハネ、炎の棘でなくして、鳩の如き聖靈を見ながらも、まだ十字架を示さるゝに至らざりし洗者ヨハネとしては、イエスの全面しかもその重要な一面を容易に認め得ざりしは止むなきことと思はれます。それに比べて十字架の恩恵に浴しつゝあるイエスの信徒は、彼ヨハネが見ること能はざりしものを見、曉ること難かりしものを曉り得る幸福と靈識を附與され居ることを思ふとき、天國のいと小さきものも、ヨハネより幸なりとイエスの告げ玉ひし言葉の深意を幾分味ふことが出来ると思ひます。感謝すべきであります。

受難週間の研究 (三)

主の名によりて来る王

小 栗 襄 三

春も未だ浅きニサン月の十日、静寂なる僻邑ベタニヤに一夜を祈りの内に過ぎられしイエスは、エルサレムに入城せらるゝ時は満ち、日は來つた。十二使徒を従へられつゝ、オリブ山麓のベテバゲ附近にて、未だ罪の子等を背にせしことなき、驢馬の子を獲て、屈折多き山麓の道を、神の獨子、人類の王、王の王は、平和の君主として、腰に一劔を佩ぶるなく、平和な驢馬に、身を委ねられつゝエルサレムへと向はれた。

彼は盛裝されし儀杖兵に守らるゝでもなく、唯彼に従ふは、此世にては最も貧しき弟子等の一群に過ぎなかつた。未だ曾つてかゝる入城が此地に

行はれし事があらう乎。ヨシヤ王を初めとし、ダビデ王、ソロモン王、シシヤク王、ウジャヤ王、ヘゼキヤ王、マナセ王、ネブカドネザル王、キロス王、アレキサンダー大帝、ヘロデ王等の入城も、このイエスが主の名によりて來りし王として入城せられしに優つたであらうか。前者の入城は此の世の權威と、劔とに依つてエルサレムに來つた。乍併ら、彼は此の世の權威に由るに非ず、神の權威を以つてエルサレムに臨んだのであつた。

途上に行交ふ過越の祭に都に詣る人々の群は、神の獨子、平和の君主、主の名によりて來りし王の容貌を眼前に拜した時に、彼の自覺と威嚴に満ち溢れた容姿は、彼等の衷心をして、これぞ久しく待ちしメシヤの到來なるを直感させずには置かなかつた事であらう。彼等は己が衣を脱ぎて途上に敷き、又或者はオリブ樹の枝を打折りて布き、又打振りて、歓迎せざるを得なかつた。彼等の口

には自づと讚美は溢れ出で、聲も高らかに。

讚むべきかな。

主の名によりて來る王。

天には平和、

至高き處に、

榮光あれ。

と。歌は涌き起つて來た。

時は後の雨も過ぎ去り、パレスチナ全土は今や春風を孕み、木々の梢に、又野の草木に春氣が燃え出る頃、天地萬物皆な悉く、我等が救主を迎へるに相應しき待望の春であつた。幾久しく兵馬と罪の子等に蹂躪されし地も石も、今や救主の馬蹄を支へる光榮に浴す時は來つたのであつた。もし罪の子等が、彼等の衷心の意に反し、神を讚美する聲を打消し、又黙すならば、石叫ぶ萬物更生の春であつた。

乍併ら、主の名によりて來りし王の入城は、此

の世の凱旋將軍が、戦ひ既に終り、民衆の凱歌に迎えられつゝ、その居城に歸り、又敵城に足跡を印する紀念の式ではなかつた。イエスの入城はこの世の王サタンと決戦を交ふ可く、最後の出陣に外ならなかつたのであつた。彼の背後には、サタンの手は犇々と追ひつゝあつた、御弟子の一人、イスカリオテのユダは、サタンの掌中に落ちつゝあり、殘る十一人の弟子の心中にはイエスが果してメシヤなるか、一縷の不安に驅られ、雙手を擧げてイエスを歓迎しつゝある群衆の讚美は數日にして、「十字架につけよ」「十字架につけよ」と。サタンの聲に代る喚聲であつた。誠に華やかなる可きイエスの入城は、讚美に送られつゝも、背後に迫るサタンの力を知るイエスは、氷雪を履む思ひであつたであらう。

孤獨なるイエスの入城は、凱旋的入城ではなく、サタンと最後の決戦にエルサレムに進撃せらるゝ

姿に外ならなかつた。唯一人、世の誰人に守らるるでもなく、只神の援助あるのみ、此れのみが、彼の唯一の武器であつた。彼の悲凄なる戦闘は、遂に今日を以つて開始されたのであつた。同時にサタンの攻撃も一段と迫撃を増し加へ、萬策はめぐらされ、總攻撃の準備は遺憾なく整備されたのであつた。

時にイエスはサタンに迎撃せらるゝ迄もなく、彼は自ら平和の驢馬に乗られて、エルサレム指して、宣戦の布告に向はれたのであつた。誠に勇壯と云はんか、悲壯と云はんか。乍併ら、人類を思ひ、萬物を思ひ、聖志を思ふ時に、彼はその使命の爲めに、この道を選ばざるを得なかつたのであつた。

彼の戦闘は如何なる結果に終つたであらう乎。苦闘の最後はゴルゴダ山上の十字架の處刑に終末を告げ、サタンの勝利に歸したのであつた。乍併

ら彼は云ふ。

我れすでに世に勝てり

と。彼は十字架上に於てサタンに打勝ち、人類の救済を開き、聖志を完全に、此世に於て行ひ給ふたのであつた。イエスの勝利は、此世に非ず、十字架に於て確立され、十字架に於て凱歌を奏されたのであつた。

ホザナ、主の名によりて來りし王、と。群衆の打振るオリブの枝も、此の事實を知るイエスには反つて淋しき憶出となつた。彼はエルサレムを眺見され、之がために泣き給ふた。(路加十九四一) 乍併ら、彼の御名を信じ、彼の完成せし贖罪の道を信ずる我等は、彼の十字架を仰ぎみて、再び此の言葉を繰返さざるを得ない。

ダビデの子にホザナ、讃むべきかな、主の御名によりて來る者、いと高き處にてホザナ。

柏 木 通 信 (第十八信)

齋 藤 宗 次 郎

南樓に出て、新緑の世界は復活の世界、希望の世界である。予は編輯室の方卓を南樓に持ち出して、日毎に緑を増し行く木々の新芽を眺めながら英文原稿の整理に當つて居る。三十餘年前恩師が鬱勃たる精神を以て正義と自由の爲に、簡勁の英文を綴りて國民の良心に懇へられしは神の深き攝理に因るものである。現代人は此預言者の警告を顧ると否に拘らず、時来れば眞理の洞口を閉塞せる岩石を轉ばし除けて、迷へる人々を光に導く力となつて現る、であらう。僅々数寸の紙片を手にして鋏と糊とを加ふる此一瑣事は、實は平和の原動力を取扱ふ一大事なるを知つて肅然たらざるを得ない。初夏の綠葉陽に輝き風に踊りながら予の小さき勤勞を鼓舞して歇まない。

恩師夫人退院 春風春雨を窓外に聽き、梅花とチューリ

ップとを床上の鉢に眺めつ、曾て突然に臨みし病痾を帝大病院の一室に療養せられつ、あつた恩師夫人には、其後漸次快癒に向ひ愈々四月二十八日夕方無事に退院せられた。久し振りにて懐かしきホームに歸られしを見て我等は

喜んだ。二ヶ月餘の病院生活に心身を襲ふ強き苦痛を忍んで靜かに時の到るを待たれし夫人には、常に神の慰めと力を受け、主に愛せらるゝものとしての高き教訓と尊き體験とを深く味はれしこと、想察するものである。

日曜日の集會 多難なるかな一日の旅路、然り基督者に取つては一時間一分たりとも戦ひのなき時はない。我等イエスの御手を離れては何事も爲し得ざる者なるに拘らず、何時とはなしに獨り立ちて日に幾度となく放蕩の途に向はんとする。身代の限りを盡さずは濟まぬ態度で敵の手段に乗せられやうとする。危険なるかな此瞬間。去れど父なる神は、我が憐むべく憎むべき叛逆の後姿を認めて常に我れに歸れよとの細くして温かき御聲を發し給ふ。我に取つては之に優るの導き強き聲はない。六日の旅路を安全に辿り得るは眞に此絶えざる神の憐憫によるのである。聽て賜はる聖日を迎へ主の御手に引かれて父の御許に臻る。我等は其處に一切を投げ出して嬰兒の如く自由に赤心を開き得るは何たる幸福ぞ

一、神と偕に歩む

一、生 命

一、新約聖書の示す三つの刺 齋 藤

鈴 木

大 島

信 通 木 柏

一、主は光又救又生命の力 秋 元

一、ヨセフの生涯 山 榊

全集讀者の感謝 神の聖圖に創まり、基督の編輯を司り

しことによつて成りし内村鑑三全集は、聖靈の助けを以て讀者の靈魂に咀嚼され行く奇しき事實を見た。四月初旬第一回配本の行はれて以來、東京市の内外は勿論、近縣並に京阪神中國東北北海道樺太四國九州那覇臺灣朝鮮等あらゆる方面より大なる感謝慰藉希望の報告を寄せ來るもの百餘通に及んで居る。僅か五人十人の義人の故に國の滅亡を免れしめ給ふ愛の神は、幾百千人の基督者を此國に起し給ふを知つて、最愛の日本國が現在光に生きつゝあるを信ぜざるを得ない。假令少數なりと雖も、只基督のみに信賴する獨立人、存在は是れ全く國家重要な事實、最大の幸福である。混濁動搖の間より選び出されし友よ、神の器具たる全集によつて益々深く聖書の眞髓を探らずや。

筆者病臥 予は四月中旬病の爲に就褥一週間に及んだ。

過去廿餘年間絶えて經驗せしことなき實に珍しき事實であつた。今や迂愚なる予は恐懼措く能はざる全集の大任を負ふて居る爲、靈と共に身の健康に随分深き注意を拂つて居る。加之多くの親愛なる教友諸姉は遙かに祈を以て最良

の援助を與へて居て呉れるに拘らず、斯の様な病氣に罹つたのは何ういふ譯であらうか、手近い所に其原因を發見することは出来ないが、然し病んで見て充く神様の御心が判る様に思はれた。發熱に伴ふ肉の疲れと骨の痛みを嘗むる間に、神様との密接の關係を遠ざけしめんとするサタンの巧みなる誘ひを感じた。我をして高ぶること莫からん爲に神の與へ給ふ一つの刺たることを味ふた。此世の如何なる所であるかの眞相を探つた。絶対信賴の言ひ盡されぬ妙味を味ふた。單に筆先き口先きにあらで眞に同胞人類に對する同情の湧き出づるを感じた。何といふ驚くべき恩恵であらう。萬人の忌避嫌惡して止まざる病氣も、聖意を透して受くる時には、主の十字架の愛を體得する爲に必要な一つの事實であることを悟らしめられた。

洗足會 二月は代々木の望月氏宅、三月は田園調希の藤木氏宅、四月は中野の久山氏宅で開會。何時も十二三名の小集會である。然し彼等は皆一度十字架に死に、基督の爲の爲に生くる點に共通の經驗と祈願とを持つ兄弟であるから聊かの遠慮もなく、誤解又分裂の患ひもない。常に自由と嚴肅とは始終を一貫する。凡ての會合は斯の様な愛と生命によつて支配せらるゝ、ならば何ういふものであらう。

祖父の書翰 (八)

江原萬里

前にも述べたやうに、文久三年八月は王政復古運動の最

大危機であつた。此の月に大和行幸が宣下され、そこで討幕の詔勅が煥發される手筈であつた。然るに俄然反動が生じて、朝議は急に一變し、大和行幸は中止された。而して討幕の主動者である長州藩は京都守護を解かれ、藩主毛利大膳太夫父子は幕府の讒を蒙つて歸國、謹慎を命ぜられた。此の時以來幕府の勢力は頓に盛んとなり、朝議を左右するに至つた。爰に於て三條公以下所謂七卿の長州落となり、勤王の志士は續々捕縛され、殺された。そして關東の諸藩は勿論、關西の諸藩も亦再び勤王を云はず討幕運動は屏息し、王政維新の大業は全く地に墮ちた觀があつた。此の事は既に述べた。

此の時に當り、津山藩主は、因幡、阿波、伊勢、備前、安藝の五藩主と相會し、毛利大膳太夫父子の讒を解かれん事を幕府に進言しやうとした。偶々藩主病み、老臣海老原信濃が正使となり、祖父が副使となつて藩主を代表して此の議に参加する事となつた。津山藩がかく卒先して長州藩

救援の擧に出た事について、祖父がどの位力あつたかは明瞭でないが、彼が副使として派遣された事によつて、其の時藩主に上書して、征長不可を痛論した彼の意見が採用されたものと想像される。

此の上書は現存しない。その翌年即ち元治元年、長州の家老か兵を率ゐて京都に侵入し、禁裡に發砲した事から、長州藩討伐の命が降らうとした頃、祖父は藩主に從ひ上京しやうとする直前、若し京都に於て藩主が幕府から長州討伐を命ぜられたならばどうするか、之に對し豫じめ對策を講じて置く必要あり、再び上書して征長不可を論じた。此の後書は前書の趣旨を繰返したものであつた之に由つて前書の内容も推測し得る。後書を読むに論理整然、趣旨明確、言はんと欲するところを思ふ存分云つてのけ、憂國の至誠、紙上に溢れてゐる。之は死を決して認めたものである事がよくわかる。

此の書は甚だ長文であつて、今こゝに全部を載せることは出来ない。その大體の要旨は、先づ長州討伐の結果の重要性を述べて云ふ。

今般長州御追討の義は、皇國盡滅の兆にて、徳川家存亡の關する處に御座候間、一入御盡力在らせられ候や

う前書既に申上候。

而して藩主は前書の此の意見を採用して、海老原信濃を上京せしめ、討長延引を周旋せしめた。藩中心ある者は、皆その英明を喜んだ。然し自分は思つた。藩主自ら上京して事に當らねば、名重からず、信厚からずと。之を以て此度上京に際し、藩主自ら此の事に當らんことを希望し、次で幕府が長州を征伐することの不可の理由を述べて云ふ。

前書に申上候通、長州御追討の義、夷人の手を借り候事、顯然に御座候處、果して今月五日夷人長州に入冠仕り候由、是れ金の宋を欺き、共に遼を取り、遼遂に金の有と相成り、宋是より歳幣を金に奉り、益々衰弱に至り候覆轍に御座候。

如何なる無頼の頑兒と雖も、親は他人の手を借りて、之を折檻せず、之れ人情の堪えざるところである。然るに幕府は既に印度を奪ひ、滿清を取らんとする英人の手を借りて長州を討たんとする。之れ一家の傾覆を悼み、盜賊を防がんとする孝子を、盜賊をして之を討滅せしめるのみならず、一家を盜賊に與へるやうなものである。

天性の骨肉、自然恩愛を以て、此の如き残忍の甚敷に至るは、是何事ぞや。剛致の然らしむる處、誠に畏る

べき義に御座候。長防勝利を得られ候時は、皇國の元氣、未だ全く地に墮ちずと申者にて、徳川家の大幸に御座候。

幕府徳川軍が敗けた方が徳川の不幸であるといふ。徳川家の親戚である藩主に對し餘りに激越な言辭である。それ故祖父はこゝに細字を以て説明して、

御大幸と申上候は、誠に恐入奉り候得共、臣非説御座候に付、御閑暇に召され候は、面のあたり言上可仕候、

と斷つて居る。更らに進んで彼は若し防長二國が敗けたならば如何を論じ、

若し二國萎靡候節は、醜夷必定、馬關に埔頭を建て、皇國の全利を管轄致すべく候。然る上は、英豪は割據、姦雄は吞食、偶々尊攘の志有之候者も亦、皆折氣、屈志、唯だ一己の利害を經營候て、天下の所謂大計大法、墮敗致すべく候。是れ、皇國の命脉既に絶滅候義にて最早此上は一本一草も皇州の有に御座なく候。

幕府のなすところはそれである。若し東照公家康が今在世せられたならば、よもそんな事はされまい。思ふに津山藩祖秀康は家康の長子にして、偶々秀吉の猶子となつた

め、次子秀忠に二代將軍を譲つた者である。加之今隠居されて江戸に在る確堂は十一代將軍家齊の實子である。故に幕府失政の此時、津山藩は家康を代表して幕府に代り、他藩以上に、皇國のため大いに忠勤を拔んでなければならぬ責任がある。

然るに此度將軍上洛して征長を内決せんとした時、因幡、備前、安藝、等の献言でそれが一時中止となつたのである。かく云つて祖父は津山藩が之に與らなかつた事を言外に非難し、更らに進んで、將軍に對して深い關係のある津山藩主は他方姻戚關係上、他藩以上に長州を援けなければならぬ事を論じ、今之を援けないのみか、去夏攝津の陣屋を貫つた禮として、長州へ鎧を贈呈する事を通じておき乍ら、今それすら實行してゐないことを非難した。それは何故か。

幕府の思召御憚り遊ばされ候義に候や。最早長州滅亡にも可及候間、取るに足らずと思召され候事哉。何分義理人情共々御棄て遊ばされ候御振舞……………御家の恥辱と奉存候……………御不義、御不人情の次第、自然發露致候は、遠近厭惡、御孤立と相成り可申、然らば何を以て天下に相立遊ばされ候哉。小國の天下に相立候は、信義禮節有之候故に御座候。

随分手厳しい。更に彼は責めて云ふ。津山藩は長州を援けず、之を傍觀してゐるどころではない。今や長州征伐に加擔しやうとしてゐる。かく

萬民の疾苦、御祭し遊ばされず、諸臣の死所御呑み遊ばされず、神州縮脉の御失策を御助遊ばされ候ては、乍恐淨光院様（先祖秀康）在天の神靈如何計り御歎息遊ばさる、と存じ奉候。

長州を伐つ事は藩の信義に關はる。先の建白の趣旨は今どうなつたか。

去年九月閣下を初め奉り、因、阿、勢、備、藝の六藩、救長の御建白在らせられ候は、天下傳承仕る處に御座候。夫れ一旦之を救候時は、假令、水火に投ぜられ候共、厭く迄其信義を貫候が、皇國廉恥の人情に御座候。兼ねても申上候通り、當時嫌疑の際、幕府を憚り、一人奮然、抽身、長州の爲め訴究の者無之處、乃ち六藩の連署之有候は、誠に天下の美事と奉存候。

されば今後如何にしたらよいか。若し幕府が長州征伐に決し、將軍自ら出馬し、諸藩主に從軍の命が下つたならば如何。諸藩は敢て將軍を諫止しないであらう。此の時に當り、之を諫止するのが津山藩主の役目であるまいか。此の時力

を盡して之を諫止せず、前年六藩救長に連署した趣旨に反

所以である。

き、若し従軍するやうな事があつたならば、不信義反覆の
臭名を重ねるわけである。何の面目あつて天下に立つ事が
出来やう。自分は六藩救長會議に副使とされたが、當時幕
府への建白書の内容が切實、懇到でなかつた事を恨んだ程
の者である。若し藩主にして長州征伐に従軍されるなら

以上が征長不可論の要旨である。私は之を讀んで、よく
も藩主に向つてかくまで思ひ切つた事を云つたものである
と思つた。然しそれは一意國を憂ひ、一身の安危の如きは
毛頭も顧みる暇なく、只誠實その者が之を云はしめたので
あることは疑ふことは出来ない。

ば、先づ當時の正使及び副使たる自分を嚴刑に處し、その
時の連署は兩人が取計つたものであつて、藩主の本意
でなかつた事を天下に公表して、然る後に従軍せられ度

藩主は善く祖父の進言を容れ、幕府に對して長州征討を
中止すべき事を説いた。

い。若し又連署の趣旨が藩主の本意であるならば、而して
臣の微衷御憐惜垂させられ候はゞ、何卒數十日の御暇

此の頃、祖父は全く決死の覺悟をして居た。南船北馬、
往席暖まらず、家に居るかと思ふと急に旅立つ事が多かつ

下し置かれ候様仕度奉存候。破格の思召を以て數十日
の御暇下し置かれ候はゞ、區々の身、一介の周旋にて

た。然かもその目的は勤王に在り、旅立つ時は生きて再び
家に歸へる見込がなかつた。その頃の彼の詩に、

も、猶克く五藩其外有志の士大夫に陳説し、牆内の鬭
争を調和し、同胞一致し、全國を以て醜夷の姦計相挫

家人草卒理征衣。 決意又勤王事時
不識此行爲死別 慇懃臨時問歸期

候様仕度

家を出る時、家人にいつお歸になりますかと聞かれ、胸中
之が永の別れになるかも知れないと思つて、明答出来なかつた。その悲壯な感を歌つたものである。

今藩主上京に際し、御供を仰せ付かつた。京都にて藩主が
長州征伐のため従軍の命を受けられたならば、之を如何に
すべきかは一藩の大問題である。豫じめ之が對策を講じて
置く必要がある。故に再び此の上書をなし意見を開陳する

身邊漫筆

○聖書の眞理を創刊以來毎月二部も購讀して居る或る熱心な讀者から長文の手紙が届いた。其の人は昨年失業して郷里に歸へり、父と弟との世話になつて暮して居る。此度彼の父が彼に働いて自分の生活を立てるまで雜誌を讀むなと云ふので、雜誌代が拂へないから残念乍ら暫く購讀をやめると云ふのであつた。私はそれを讀むなり、氣の毒に思つて、半年間無料で御送りすると返書を認めた。

○其の時不圖私に別の想が起つた。私は返書をつたつたに切り裂いて仕舞つた。そして別の手紙を書いて送つた。御手紙繰返し拜見、私は御父様の仰しやる事を至極御尤の事と思ひ、同感致しました。あなたは私の雜誌を熱心に讀んで下さいました。又他の同種の雜誌も澤山讀まれ、○○○全集も熱心に讀まれて居る御様子です。若し其等の中に在る只一つの事だけを實際に御活用下さらば、それで私の願は足ります。少なくとも私の雜誌は讀まれる必要はありませんまい。

○あなたは此迄に聖書に關する知識を澤山御有ちです。又此迄東京で色々の仕事を習得さ

れました。どうぞ其の二つを活用して下さい。御令弟を助けるのも善いでせうが、一本立になられる事は尙善くありません。一生懸命、正直に、勤勉に、辛抱して自活の途を講じて下さい。それまで私の雜誌の購讀を御見合せになるのは善い御考と思ひます。若し此後あなたが足腰立たずなられ、永く病床にても仰臥せられるやうな事が萬一ありましたならば、私は喜んで雜誌を差上げます。云々。

○若し本誌が惱め人々に慰を供せず、失望せる方に力を與へず、知識の迷雲中に在る人にも何等かの光明を與へないならば、本誌の發行は無用の事と思ふ。それ故私に創刊の際友人に購讀を依頼した外何人にも自ら之を依頼した事はない。只私の友人が本誌を價値ありとして紹介されるまゝに委して居る。

○家に福音的信仰があるなしがどの位家の中を明暗にするかを私自身深く體驗して居る。私が憂鬱になると一家が悉く暗くなる、子は柔順でなくなる。私が心に平安と歡喜とを感ずると家中明るくなる。子は兄弟仲よく、親に従順である。福音が家庭に必要である事を近來益々痛切に感じた。

○私は毎月一回大い第三日曜日の午前に私

の宅で小集會を開いて居る。人数は増しもせず、減じもせず、集まる人々は最早兄弟のやうに親しくなつた。此の集は今後も益々深められてゆくことであらう。私は昨今基督教の大意を話して居る。今年中かゝるであらう。

○集まる人は殆ど皆返子、横須賀、横須賀以南の人である。私は鎌倉に住み乍ら此の地の人々に福音を傳へ得ないのを残念に思ひ、先日來どこか日貫の場所で講演會を開かうかと思ひ、度々祈つた。そして今は聖意でない事を知つて斷念した。

○私には講演よりも執筆よりも他に生命がけの仕事がある。それさえ完くし得たならば私は生き甲斐がある。それはキリストを信ずる信仰に徹する事である。彼と深く交り、眞實に彼を我が身に宿し奉る事である。その生命を受け、彼が私を愛し給ふやうに私の周囲の人を愛する事である。彼が父なる神の御聖意を成さんとて死に至るまで従順であり給ふ如く、私も彼に服ふ事である。

○どう見ても西洋の物質文明は行詰つた。今後益々産業は不振を極め、生活は不安定となり、犯罪は瀰漫するであらう。ノアの洪水が來る。誰か今箱舟を造る者ぞ。講演でない。

江原萬里著

聖書の現代經濟觀

定價 一圓二十錢
送料 八錢

幾度讀んでも面白いと云ふ人のある事を度々きかされる。

(聖書の眞理社にて取扱ふ)

藤澤武義主筆

求道 一部 十圓錢
一年 十圓錢

(送料共)

山陰の一角に在り、困苦逆境と戦ひつゝ、勇敢にキリストの證明をなしつゝある、我等の同志の福音雜誌である。本號寄稿の森本慶三氏は此の雜誌に毎號寄稿されて居る。階寫刷二十四頁。本誌讀者の方々に紹介す。御購讀下さい。

ついで乍ら、森本慶三氏は私の尊敬する同郷の先輩であつて、内村先生に聖書研究誌創刊當時から親しく師事され、教を受けること深く、關西に於ける信仰の重鎮であります。先年私財を擲つて津山市に立派な基督教圖書館を建設され、聖書を國民の書とするため献身的努力をされて居ます。(江原)

發行所 米子市角盤町二ノ八一 求道社

(昭和三年二月十六日) 聖書之眞理 第五十六號

尙左記雜誌の購讀をお勧めし度くあります

星野香澄主筆

信仰の神祕 一部 二十錢
一年 二圓

今まで平信徒の獨立と題したものを今月上旬の如く改題す。清冽、眞劍、藤井武君を想はしめる。

東京府和田堀町永福寺三五四

發行所 平信徒之獨立社

振替東京七三九八九番信仰の神祕社

原田美實主筆

基督 一部 二十錢
一年 二圓三十錢

本誌に又各地の講演に、必死の覺悟で基督の福音を説かる。かゝる人があつて福音が此の地に植えられるのであると思ふ。

静岡市北安東町五

發行所 基督社

振替大阪五四七八番

本間俊平著 (實業の日本社版)

心靈の戰場から

定價 一圓

此の書は教理を説かず、愛がどんな働をするかを實際に示す。そこに人を教え、動かす尊いものがある。

昭和七年六月一日發行 (毎月一日一回發行)

聖書の眞理定價 (送料共)

一部 二十錢
半年(六部) 一圓十錢
一年(十二部) 二圓十錢
海外一年 二圓六十錢

拂込は聖書の眞理社(振替東京六三三七五番)へ。獨立堂にてよし。

昭和六年度合本 二圓五十錢
送料共

總クロス製

残り少々あり

昭和七年五月廿六日 印刷納本
昭和七年六月一日 發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三三四三

編輯印刷 江原萬里
兼發行人

東京市外澁谷町向山九七

發行所 聖書の眞理社

東京市神田區表猿樂町一九

印刷所 共榮堂印刷所

東京市外淀橋町柏木九四六

發賣所 獨立堂書房

振替東京二齒六番

本誌定價二十錢